

編集後記

この雑誌が始まったのは杏林大学大学院国際協力研究科の教授、平松先生の御尽力によるものであった。これが第1号であり、今回が2号にあたる。

また、昨年4月に設立された国際医療協力専攻の院生にも論文掲載のチャンスとするために原稿書式を改めることとさらなる発展を目指して大学院雑誌の定期発行化をはかるものである。院生への論文募集期間が短かったために周知徹底できたかどうか問題であるが、ここに5論文を集めることができた。

この『大学院雑誌』のレベル向上を計っていくためには院生自らの積極的な参加を呼び掛けたいと考えている。しかし、これは当分の間、教務委員会が編集委員会を兼務することになるが、いずれは院生が企画し、われわれは院生の依頼でこの雑誌に参画することが望ましいことはいうまでもない。

編集委員会は国松教授、吉竹教授、阿久澤教授、金子教授、今泉教授、私で構成され、忙しいなか貴重な時間を割いて原稿読みをしていただいたことを報告し、感謝の意を表しておきたい。最終的に、関連分野の先生がたに院生論文の審査をお願いして出来上がったものである。この紙面を借りてご指導いただいた先生がたに御礼をいわなければならない。また、今回からそれぞれの演習担当の先生がたの推薦文も載せることにした。

この国際協力研究科が出来上がって10年余を過ごしてきたが、ますます、この分野の世界からの要請が高まっていると考えられ、他大学もこの分野への進出が顕著であるけれども、さらなる発展は教員だけではなく、院生のレベル・アップにあると考えられる。

現在では大学院の研究発表の場としての雑誌を持っている大学院が多いが、厳格な基準を提示したものは少ない。また、わが大学院特有の専攻として来年いよいよ医療協力専攻の院生達もこれに参加してくることになる。意欲的な研究雑誌を目指して協力体制を作る必要がある。

今回作成した執筆者要項はこれからも発展させていくべきであり、試行錯誤でよりよいものにしていきたい。

そして、何よりも院生たちの励みになればと考えている。

杏林大学大学院国際協力研究科

博士(商学)

教務委員長 武内 成